

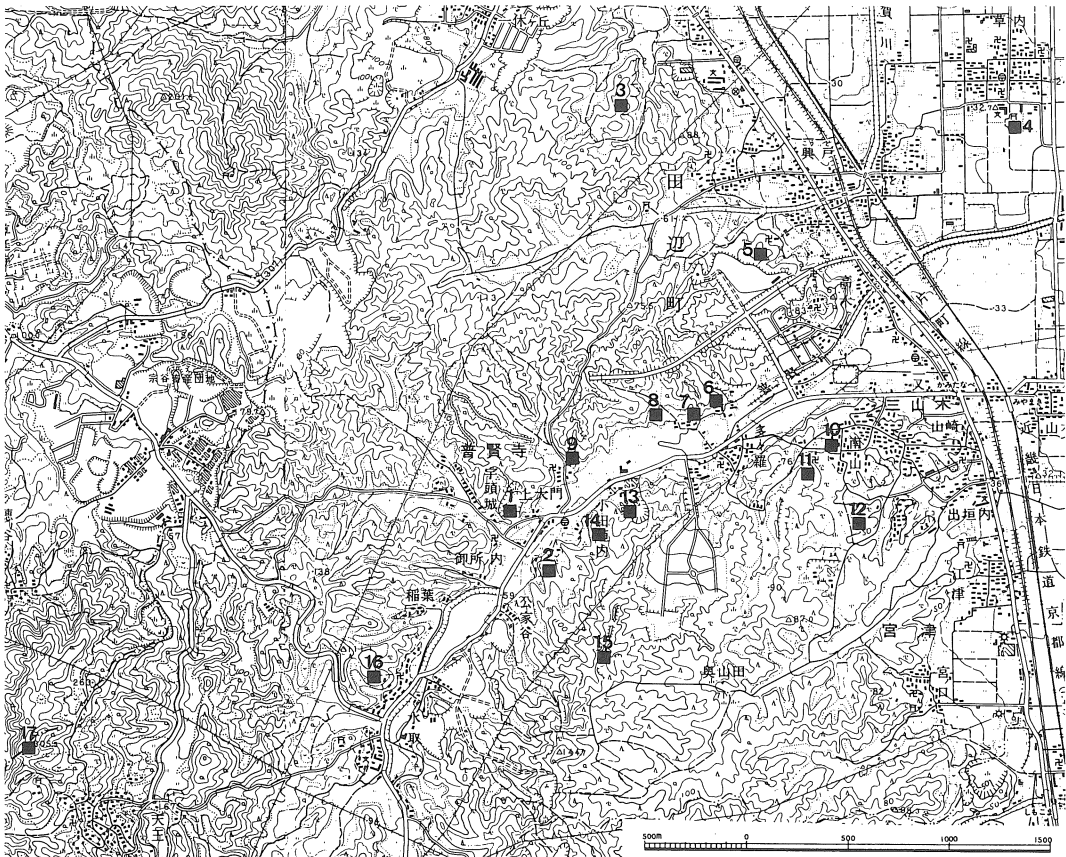
田辺町普賢寺の大西館

高橋 美久二（館長補佐兼資料課長）

1. はじめに

昨年の館報で、南山城の銘文を集めてパソコンに入力し、その成果を公表した。^(注1)しかし、その中では実際に銘文によって、地域の歴史資料としてさらに地域史研究を進めるところまではいかなかった。南山城の銘文を集める作業の過程で、いくつかの注目すべき銘文に出会い、さらに追求して地域史研究を進めてみたいと思うものがあった。その中の

ひとつが、綴喜郡田辺町普賢寺の観音寺境内にある地祇神社の石段の銘「天文十丁丑年卯月吉日 大西備前守」とあるものであった。^(注2)というのは、かつてこの地祇神社のすぐ西側に所在した「大西館」と呼ばれる中世の館跡の測量調査の一端に関わったことがあったからであった。本稿は、この大西館の測量調査成果の概要報告と石段銘の大西氏とさらに中世の普賢寺谷の氏族の動向を探ってみたものである。

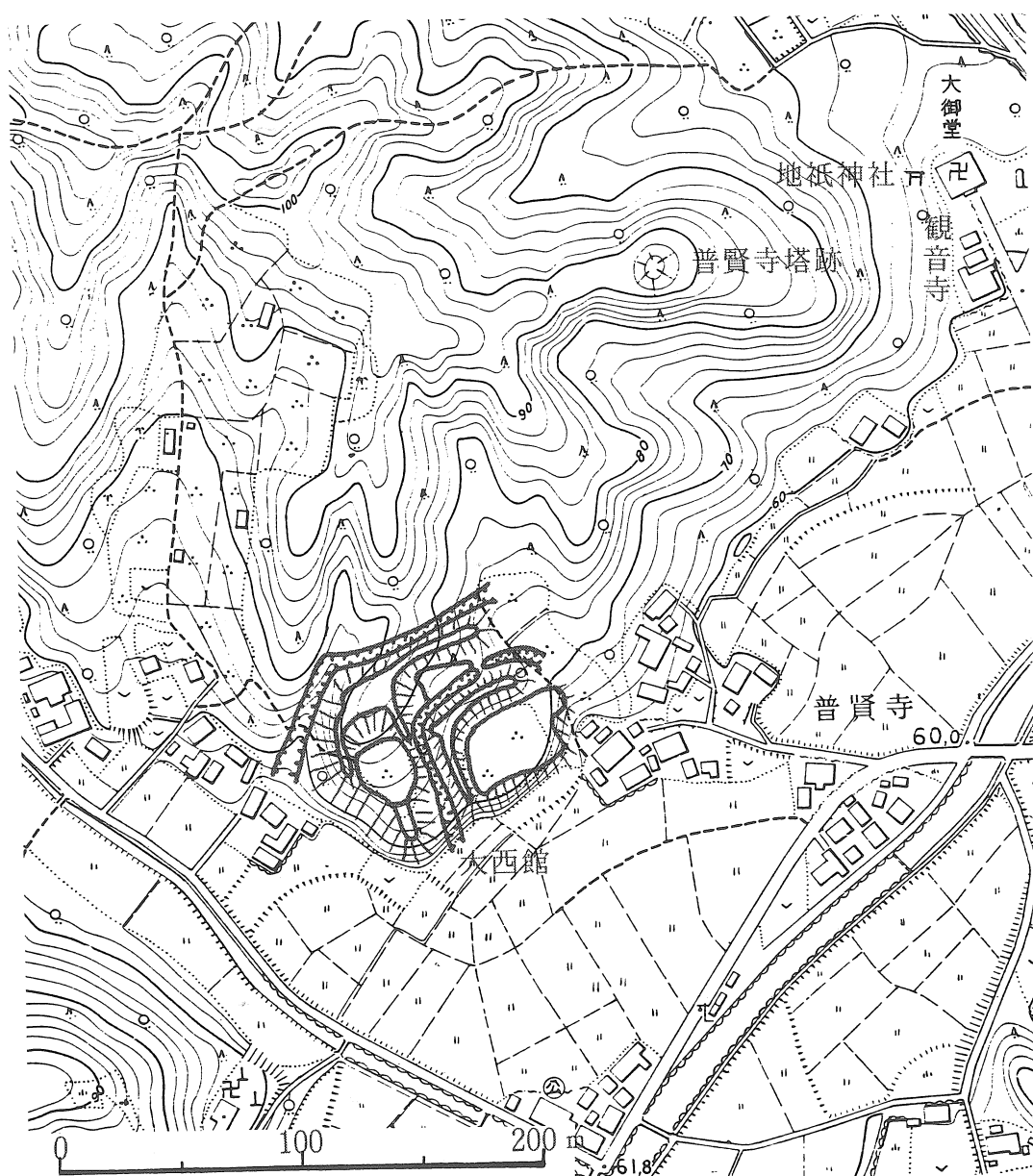


第1図 普賢寺谷の城館群

- 1.大西館跡 2.小田垣内遺跡 3.田辺城跡 4.草内城跡 5.興戸城跡 6.都谷遺跡
7.新宗谷館跡群（同志社校地 Loc. 3） 8.同志社校地 Loc. 5 9.同志社校地 Loc. 12
10.南山城跡 11.口駒ヶ谷遺跡 12.木原屋敷跡 13.無名城館 14.無名城館 15.西平川
原館跡 16.水取城跡 17.天王畑城跡

ところで、近年の城館調査の進展は目を見張るものがある。とくに京都府下では、城館の調査は丹波、丹後地方でより先進的に進められ、1980年の『日本城郭大系』11（京都・滋賀・福井）^(注3)でも、丹波丹後では踏査、実測による縄張り図が多く載せられており、発掘調査による成果の蓄積も多い。しかし、南山城での城館調査は遅れ、1982年の中井均氏の

克明な現地踏査による報告^(注4)以外ほとんど見るべきものが無いのが実状であることは、既に館報第5号で述べた^(注5)とおりである。ただ、南山城でも城館の分布密度が最も高いとされる田辺町普賢寺谷の城館群についてだけは、発掘調査も徐々に進み、1977年の都谷館^(注6)、1981・1982年の口駒ヶ谷館^(注7)、1988年の小田垣内城館^(注8)などの発掘調査が行われた。とくに、1988年



第2図 大西館付近地形図

の小田垣内城館の発掘調査は注目された。ここでは、平安・鎌倉時代から続く館が、室町時代に一時墓地として利用されたのち、15～16世紀に新たに堀、土塁を設け防御の施設を整えていることが判明したことなどである。ここに報告する大西館も普賢寺谷の城館のひとつで、小田垣内城館とは谷を狭んで対向する位置にあたる。

2. 大西館の調査

大西館は京都府綴喜郡田辺町大字普賢寺小字上大門に所在する。この地は、山城国と河内国を界して、生駒山から北に延びる甘南備山塊の中央やや東寄りに位置し、西から東に流れる普賢寺川が開削した普賢寺谷に臨む南向きの兵陵端に位置する。この普賢寺川の谷と西方河内側の穂谷川が開削した谷は、河内国と山城国とを結ぶ街道として、古来から重要な交通路となっていた。大西館は、この重要な街道を一望におさめて掌握できる軍事上の重要な位置を占めていた。

1971年8月、大西館を含む丘陵が伐採された。そして、これが伐採されたのは、この土地の土砂を採取し、その跡地を茶畑に造成される計画のあることを知った田辺町民の一人から、田辺町教育委員会へ連絡があった。同町教育委員会では、ただちに京都府教育庁文化財保護課へ連絡し、その保存方法について意見を求めた。そして、当時同課に所属していた筆者が、同年8月24日に現地調査に派遣された。伐採された現地に来てみると、土塁や堀の様子が極めて明瞭になった城館の遺構が目に入った。それは、一見して中世城館跡とわかるもので、しかも極めて遺存状況の良好な城館の遺構であった。このため、当該工事の計画者と保存について協議するとともに、この遺構の全容を把握するための地形測量の必要のあることを述べた。

この城館の遺構については、土砂採取のダンプカーの進入路の問題等が解決しないため、

当分そのまま残ることとなったとの連絡がその後同町教育委員会からあった。

地形測量については、田辺町教育委員会では当該工事の計画者が測量中であったので、その測量図を使いたいとの事であった。そこで、測量を請負った会社に行き、ほぼ出来あがっていた測量図を見たところ、地形の大体は入っていたが、堀や土塁の微妙な地形が表現されていなかった。このため、測量の要点を述べ、遺構の表現のため改めて田辺町教育委員会から同社に測量を委託することとなった。この測量のための費用の支出が、同町教育委員会のはじめての埋蔵文化財の調査費の支出となったのであった。そして、同町教育委員会では、その測量費の京都府の補助金を要請された。これが、京都府が市町村へ埋蔵文化財の調査に補助金を交付した初めての例となったのである。^(注9) 筆者は当時、田辺町教育委員会からの依頼によって、この測量調査の実績報告に添付するために、測量調査と大西館の概要についての簡単な文章を書いたことがあった。

その後長い間、この大西館のことは全く忘れていた。ところが、近年城館について、とくに普賢寺谷の城館が注目されるようになってきた。しかも、残されていると思っていた大西館は、いつのまにかダンプカーの進入路の問題等が解決したらしく、全く削平されてしまっていたのである。したがって、当時測量した地形図だけが、大西館の状況を物語る貴重な資料となったのである。そして、1988年には前述のとうり大西館に対向し、性格のよく似た小田垣内遺跡が発掘調査され、大西館の地形図の重要性はますます高まったのであった。

3. 大西館の形状

1971年に実測された大西館の測量図が第3図であり、第2図は当時の田辺町発行の三千分の一の都市計画図による付近の地形図である。これらの図と当時の踏査所見にもとずい



第3図 大西館地形実測図

て、大西館の概要を見ていこう。

大西館は、標高70～80mで北から南に延びる幅約80mの小丘陵の先端を利用して築かれている。平野に接する丘陵南端から北へ約80mのところ、長さ90m、幅7～8m、深さ2～3mの堀割を作り、丘陵を切り離している。堀割の南側には幅約10m以上、高さ約5mの土塁を築いている。この土塁の西端はやや高く幅が広くなり、しかも頂部がやや平坦になっているので、物見台のような施設があったかとも思える。この土塁の南側には東

西に二つの郭が作られている。

西郭は物見台状の土塁の南側に東西22m南北26mの平坦面を作っている。北側は物見台状の土塁を急崖で切り落とし、その東西両側から幅約3m、長さ約9mの細い土塁が南に延びている。南側には、平坦面の先端にさらに幅5m、長さ11mの平坦な突出部がある。平坦面の南と東西両側は高さ約10mの急崖に切り落されている。

東郭には西郭と共有する土塁の南側に、さらに東郭だけを囲むもう一重の堀割と土塁が

ある。したがって、東郭は二重の堀割と土塁に囲まれていることになる。その堀割は、西郭とを限る西辺と、北辺とにあって鍵の手になっている。この堀割は幅5～6m、深さ2～3m、西辺の全長は約40mに及び、北辺は約50mに及ぶ。北辺の堀割は、北東隅でやや南に曲がっているので、堀割は東辺にも一部廻っていた可能性もある。この堀割は北方の丘陵を切り離した堀割より深く、狭いため急崖となって防御の機能は、はるかに大きい。堀割の東寄に幅1mの土橋が作られ、北側の土塁の南斜面の途中にある、幅22m、奥行11mの三角形の平坦地（北部）の東端に渡ることができるようになっている。堀割に平行して、東郭の北辺と西辺に高い土塁が築かれている。土塁は幅15m、高さ7～9m、北辺で全長約40mを測り、西辺で約25mを測る。東郭の平坦面は東西に長い長方形で、東西約48m、南北約25mを測る。平坦面の南辺、東辺とも約7m前後の急崖に切り落してある。ただし、東南の角を切り欠いたように窪めて、やや緩傾斜にしてある。ここに、南からの出入口を設けたものと考えられる。

以上のように、大西館と呼ばれる館跡は、西郭、北郭、東郭の3つの郭から構成される。そして、背後を二重の堀と土塁に囲まれる東郭が主郭であることは明瞭で、北郭はその東郭に付属する郭であることも明らかである。西郭が東郭に付属するものか、別の時期の郭であるのかは、発掘調査が行なわれていないのでよくわからない。防御の構造が発達していない様相のみられる西郭が、防御機能の大きい東郭より古いとも思われるが、東郭の堀と土塁の築造によって西郭が損傷された様子がみられないので、同時に存在した可能性の方が大きい。

ところで、従来普賢寺谷の城館の多くは、その構造が防御機能が発達していないことなどから、南北朝時代から室町時代前半（14世紀～15世紀）までのものと考えられていた。^(注10)

そして、発掘調査されていた都谷城館や口駒ヶ谷城館などの遺構もその時代のものであったため、その印象が少なくなかった。しかし、この大西館の場合は、防御の機能が発達したもので、戦国時代（16世紀）の様相と見られる。このことは、対向する小田垣内城館が、1988年の発掘調査によって、室町時代の石仏を埋めて土塁が築かれ、堀が掘られて戦国時代に防御の機能が加えられていたことが判明したこともよく符合するものであろう。

4. 大西館と古図

ところで、ここまでこの館の遺跡を「大西館跡」として述べてきた。これは、この遺跡を「大西館跡」と呼ぶのは、地元の伝承の他に、観音寺に所蔵する古図「普賢教法寺四至内之図」^(注11)にのせる大西館の位置に基づく（第4図）。地元の伝承は逆にこの古図によって作られた可能性もないではない。伐採されて明らかになった館跡は、この古図に描かれた、「大西館」と「公文所」を合わせたものにきわめてよく似ている。すなわち、西郭を「大西館」、東郭を「公文所」にあてれば、周辺の地形や観音寺と集落との位置関係などは、ほぼ完全に一致する。さらに、「公文所」の背後には堀割がめぐっているように描かれて東郭の様子と一致するのに対し、「大西館」は背後に堀割が描かれていないことや南側に突出する部分があり、そこに入り口の階段が設けられた様子は西郭によく一致する。また、東郭と西郭との背後には一続きの丘陵が描かれ、物見台状のものがのる土塁としたものに一致する。したがって、この古図は館の状況が明瞭な時点で描かれたと言わざるを得ない。

ところが、この古図には「正長元年戊申歳次三月中幹日改正之」「天文貳年六月再画」などと書かれていて、その信憑性をめぐって議論のあるものなのである。とくに、最近この図を細かく検討された藤本孝一氏はこの図の描法、年号の記載の仕方、他の椿井文書と



第4図 大西館の古図

の比較によって、これがいわゆる椿井文書であって、天明8年(1788)以前には遡れないものとされた。^(注12)そして、その図は現地の景観ともよく合い、作図するに当たり現地調査や史料採訪を行っていたとされた。さらに、^(注13)この図は天明8年作の「山城國普賢寺郷惣図」を典拠として描かれたものとされた。その図では、それぞれの遺跡が位置を示す方形区画のみで表現されたものとなっているが、「普賢教法寺四至内之図」は鳥瞰図風の立体的表現で建物などが描かれている。これを、藤本孝一氏はこの立体的表現は現地調査等に基づいて描き起こしたものとされた。先に見たように、古図の「大西館」部分の図は、詳細な地形測量図によっても、きわめてよく一致し、その上に描かれた建物群は、その地形にきわめてよく合って配置されているのである。それは、あたかも建物が建っていたときに描かれたかのようで、建物がなくなり、樹木に覆われた段階ではとても描けないように思える。藤本孝一氏の古図に対する考察は、残念ながら古図に描かれた建物の消長や人物の存在を他の史料から傍証していくという歴史的な考察によって、この図が偽物と決められたわけではなく、あくまで絵画の描法とその上に書かれた文字表現によるものである。この古図については、藤本孝一氏以前にも、これが椿

井文書で、近世後期または明治時代になって描かれたものであることは指摘されていた。それでもなお、この図がきわめて現地の景観をよく描いているため、何らかの史料によって描かれている可能性が高く、近世または近代になって、すべてが捏造されたものとは考えられていなかった。

それでは、大西館の歴史的な位置づけや大西氏と普賢寺谷の土豪の動きをみていくため、15、16世紀の普賢寺谷の史料をみていきたい。

5. 15、16世紀の普賢寺谷と大西氏

付表1は、管見にあがった各種の史料によって、15、16世紀の普賢寺谷と大西氏の年表を作成したものである。^(注14)ただし、これらの史料のうちには、信憑性の乏しいものが少なからずある。例えば、1、3、4の史料は藤本孝一氏の指摘によって近世に作成された椿井文書とされた『興福寺官務牒疏』であり、2、21、30、32、36は『綴喜郡誌』所収の椿井文書の可能性の高い史料であり、14、33はそれぞれ『綴喜郡誌』、『田辺町史』に所収された文書であるが、文書の内容に疑問のあるものなのである。しかし、それらの点を考慮に入れながらも、この年表を通観することによって、15、16世紀の普賢寺谷の土豪の動向とそこに占める大西氏の位置の概要を知ることができる。

この普賢寺谷は、古代には綴喜郡の綴喜郷と呼ばれ、綴喜郡の中心地であったが、「筒城大寺」とも称された古代寺院普賢寺が隆盛となり、地名も普賢寺と改められた。地名もそこに所在する寺も普賢寺となり、混同しやすいことから、地名のときは「普賢寺谷」と記されることが多く、寺名の方は「観音寺」、「大御堂」と呼ばれるようになり、現在では寺名は正式に観音寺となっている。この観音寺には、天平彫刻を代表する国宝木心乾漆十一面観音立像があることで有名である。境内

表1 15・16世紀の普賢寺谷と大西氏年表

番号	年号	年 月 日	西暦	事 項	出 典
1	永享	9、11、7	1437	普賢寺伽藍ごとく炎上する。	興福寺官務牒疏所収補略録
2	永享	10、	1438	普賢寺再興のため大西志摩守、朱智実好らが諸国を勧進するという。	綴喜郡誌所収寺伝
3	永享	11、9、13	1439	普賢寺大御堂、小御堂が完成し、遷仏式が行われる。	興福寺官務牒疏所収補略録
4	嘉吉	1、4、16	1441	普賢寺に「僧房十八口、今廿口、交衆十口、属侍十三家」有りという。	興福寺官務牒疏
5	宝徳	3、2、8	1451	普賢寺殿原七十余人、守護（畠山持国）に背いて天王畑城に立て籠る。	経覚私要鈔
6	寛正	6、11、28	1465	幕府が普賢寺名主沙汰人などの山城諸氏に稲八妻公文の誅戮を命じる。	親元日記
7	文明	3、6、12	1471	椿井の新城に立て籠った普賢寺中氏などが西軍大内衆に攻め落される。	経覚私要鈔
8	文明	14、12、27	1482	東軍畠山政長勢が草路城に立て籠るが、西軍義就方に攻め落される。	大乘院寺社雜事記
9	文明	15、9、9	1483	西軍義就方の大将斎藤彦次郎と古市衆が天王畑城に陣を取る。	大乘院寺社雜事記
10	文明	17、10、14	1485	山城国内で西軍義就方の城は十ヶ所で、天王畑城も河内国人が守備す。	大乘院寺社雜事記
11	文明	17、11、16	1485	山城での両陣は、天王畑城などの西路は大略西軍義就方となる。	大乘院日記目録
12	明応	2、9、11	1493	山城国人数百人稲屋妻城に籠り、山城に入部した古市氏と戦い敗れる。	大乘院寺社雜事記
13	明応	2、10、22	1493	下狛大北氏、稲八妻氏が出張り、普賢寺の上被官の在所を焼き払う。	大乘院寺社雜事記
14	永正	4、10、23	1507	筒井氏から普賢寺衆徒に寺領として山本、飯岡、高船等が下付される。	綴喜郡誌所収文書
15	永正	13、4、12	1516	興福寺衆徒等普賢寺悪党の成敗が遅れたことを幕府に訴えんとする。	春日神社文書
16	大永	1、8、	1521	朱智神社の造営にあたり、下司殿や普賢寺郷他諸村から奉加がある。	綴喜郡誌所収文書
17	大永	3、11、24	1523	普賢寺の少三郎殿内方、ひめ太郎女から高神社宝堅へ奉加がある。	高神社宝堅目録
18	天文	10、4、	1541	大西備前守が普賢寺境内の「権現大明神」の石段を寄進する。	地祇神社石段銘
19	天文	13、11、21	1544	普賢寺大西内松尾又三郎の草内所在田地を東村大日堂に永代売渡す。	田辺町史料集所収文書
20	永禄	2、6、	1559	普賢寺境内の「権現大明神」に石灯籠が寄進される。	地祇神社石灯籠銘
21	永禄	8、7、	1565	三好党の兵乱により普賢寺炎上、仏堂一字を残すのみという。	山城誌、綴喜郡誌寺伝
22	永禄	10、4、12	1567	松永久秀、山城普賢寺谷を焼く、ついで奈良に帰る。	沢蔵及松永乱記
23	永禄	10、10、23	1567	普賢寺谷にいた三好長逸の子久介、三淵弾正と炭山に戦い打ち果たす。	多聞院日記
24	永禄	12、4、17	1569	山城普賢寺衆が腹を切る。	二条宴乗記
25	永禄	12、4、18	1569	織田信長の命で普賢寺谷の城、今中・上松・大西・田辺以下生害さる。	多聞院日記
26	永禄	13、10、13	1570	牢人衆が普賢寺谷に籠り京道かとめられる。	二条宴乗記
27	元亀	2、5、1	1571	細川藤孝、三淵藤英らが普賢寺へ出陣し、これを降す。	元亀二年記、多聞院日記他
28	元亀	2、10、11	1571	松永久秀、榎島城を攻め、普賢寺の城へ入る。	言繼卿記
29	元亀	3、1、26	1572	石成友通あて普賢寺などの所領を給与する旨の織田信長朱印状出さる。	織田信長文書の研究所収
30	元亀	4、7、18	1573	大西備前守敏元將軍義昭と榎島城で織田信長に敗れ、普賢寺に逃れる。	綴喜郡誌
31	元亀	4、7、20	1573	將軍義昭、榎島城から普賢寺へ出奔する、ついで河内へ出奔する。	公卿補任
32	天正	1、11、16	1573	大西備前守敏元、河内若江城で織田信長に敗れ、討死する。	綴喜郡誌
33	天正	5、9、16	1577	織田信長から普賢寺惣侍中あてに旧領を返付する旨の沙汰がある。	田辺町史所収文書
34	天正	5、	1577	普賢寺領境に山守が年始に往連を引廻ることで村々から証文をとる。	田辺町史料集所収文書
35	天正年中			山守6人は「山守先祖書」により往古から大西家から出る家筋という。	田辺町史料集所収文書
36	年不明この頃			大西備前守敏元の子貞元、母方の姓藤林に姓を改めるという。	綴喜郡誌
37	天正	7、4、17	1579	近衛殿知行の普賢寺谷の櫓の太木が春日社造替の材として寄進される。	多聞院日記
38	天正	10、6、2	1582	本能寺の変後徳川家康、堺から普賢寺谷を通り、三河に逃れる。	宇治田原町史所収文書
39	天正	18、9、6	1590	山口玄蕃頭にふけん寺村322.07石他の知行を与える秀吉朱印状出さる。	京大法学部文書
40	慶長	4、8、14	1599	白山神社本殿を普賢寺庄宮口惣中で造立する。	白山神社棟札

からは白鳳時代、奈良時代、平安時代の瓦など多数が出土する。^(注15) 現本堂の西側丘陵上の平坦地には、古代の塔の存在を示す中心礎石が残され、さらに上面が平滑な自然石からなる礎石列なども確認される。この寺は、創建以来度々火災に遭い、その度に再建されてきた。15世紀に入っても、永享9年(1437)に普賢寺伽藍がことごとく炎上し、大西志摩守などの地侍が合力して復興にあたった。この造営に奉加した人々の様子はよくわからないが、普賢寺の「属侍十三家」(『興福寺官務牒疏』)とか普賢寺谷の惣氏神であった朱智神社に勤番した「普賢寺、下司、大西、菊原、長岡、中西、城之七家」(『綴喜郡誌』所収『朱智神社記』)などの地侍を中心に近郷の他村へ奉加が求められたことが想定される。それは、大永元年(1521)に朱智神社が造営された際に下司殿はじめ普賢寺郷内外の諸村から奉加があった(『綴喜郡誌』所収『大永元年朱智大室天王宝堅流記』)ことや、大永3年の高神社(綴喜郡井手町多賀所在)の造営にあた

り、多賀郷内はじめ多賀郷外の「ふけんし少三郎殿内方」や「フケンシひめ太郎女」など近郷の村々の有力者から奉加があった(『大永三年高神社宝堅目録案』)ことなどからも類推される。

このように、普賢寺谷の地侍たち(普賢寺衆)は、惣氏神の朱智神社や惣氏寺ともいえる普賢寺を中心とした結束がみられる。このことは、宝徳3年(1451)に「普賢寺殿原七十余入」が守護畠山持国に背いて天王畑城に立て籠もった(『経覚私要鈔』)ことから想定される。そして、文明3年(1471)に普賢寺中氏が、狛下司氏、下狛大北氏、田辺別所氏とともに椿井の新城に立て籠もって、西軍大内氏と応戦している(『経覚私要鈔』)ことから、普賢寺衆は、応仁の乱(1467~1477)の際には東軍に属していたと考えられる。さらに山城国一揆(1485~1493)の前哨戦とも言うべき文明14~17年(1482~1485)の戦乱においても、普賢寺衆の城である天王畑城が西軍の河内国人に占拠されていた(『大乘院



第5図 大西館全景(南から)

寺社雑事記』ことから、普賢寺衆は引き続き東軍に属して戦っていたことがわかるとともに、山城国一揆の際には、積極的に参画していた国人であったことも想定される。それは、山城国一揆解体直後の、明応2年（1493）10月に普賢寺の「上被官の在所」が焼き払われた（『大乘院寺社雑事記』）ことから考えられる。

16世紀前半の普賢寺谷は、大永元年（1521）の朱智神社の造営（『綴喜郡誌』）、天文10年（1541）の地祇神社石段の造営（『綴喜郡誌』所収石段銘）など戦乱後復興も計られたが、16世紀後半になると再び戦火が激しくなってくる。すなわち、永禄8年（1565）三好党の兵乱により、普賢寺が炎上し、仏堂一字を残すのみ（『綴喜郡誌』ほか）という状況となった。この頃三好政権下では、本拠地飯盛山城に近い関係などで、この普賢寺谷にも三好党の支城または砦が置かれ、根拠地の一つ

とされたい。永禄10年（1567）6月には、普賢寺谷は三好三人衆と離反した松永久秀に責められた。同年10月の山城炭山の合戦には三好三人衆の一人三好長逸の子久介は普賢寺谷から出陣した。翌永禄11年には、織田信長の入京によって、畿内はほぼ1カ月で平定された。その後も、普賢寺衆の一部では、信長に対する抵抗が続いたらしく、永禄12年に普賢寺谷の城、今中、上松、大西、田辺氏などが織田信長の命によって切腹させられている（『多聞院日記』ほか）。さらに、元亀2年（1571）5月には細川藤孝らに（『多聞院日記』ほか）、同年10月には松永久秀によって（『言継卿記』）攻められた。ところが、翌年正月には織田信長から、將軍足利義昭の指令として三好三人衆の一人石成友通宛てに普賢寺などが所領として給与されている（『織田信長朱印状』）。元亀4年7月將軍足利義昭が山城槇島城で挙兵するや、石成友通も山城



第6図 大西館東郭背後の土塁と堀割（東北から）

Topographic map of the area around Himeji Castle, showing the city of Himeji and surrounding areas. The map includes contour lines, roads, and various landmarks. Key locations labeled include Himeji Castle (姫路城), Himeji Park (姫路公園), Himeji Museum (姫路博物館), Himeji City Hall (姫路市庁舎), and Himeji Station (姫路駅). The map also shows the surrounding mountains and the city's layout.

– 64 –

ない、朱智神社の運営に当たる有力家の一家であったとする所伝から推定される。さらに、織田信長に切腹させられた普賢寺衆の一人に、大西氏が入っていたことも傍証となる。また、大西氏の家来の一人松尾又三郎なるものは、在所から離れた草内にも田地を所有していた（『田辺町史史料集』所収『大徳寺文書』）ことがわかるなどは、大西氏に異姓の家来がいて、それが在所以外にも勢力を伸ばしていたことを物語るものであろう。そして、後の所伝ではあるが、大西氏が普賢寺領境を管理する「山守」となる家筋であった（『田辺町史史料集』所収『西尾吾郎家文書』『享和元年普賢寺郷旧跡写』）ということも、普賢寺谷の大西氏の位置を考える上で重要となる。

6. まとめ

以上みてきたように、15世紀には普賢寺谷には多くの地侍がいて、それぞれが、小規模な城館を構えていたと考えられる。そして、

普賢寺谷の共通の詰の城として谷の最も奥の最高所に天王畑城を築いていたと考えられる。その地侍たちは「普賢寺衆」ともよばれ、朱智神社や普賢寺といった共通の祭祀圏で結束し、小勢力の連合体ともいうべき形で外の勢力と対峙していた。15世紀後半の応仁、文明の乱に際しては、その多くは細川氏の被官として東軍に属していたと考えられる。そして、16世紀後半には細川氏の家臣であった三好氏が覇権を握ると、三好氏に属して、織田信長に抗し、壊滅的な痛手を蒙った。

こういった普賢寺衆の動きの中で、指導的な立場にあったひとりが大西氏であった。そして、その大西氏の城館は、伝承や古図、大西氏がその階段を寄進した地祇神社との位置関係などから、今回報告した「大西館」とみて間違いない。この大西館は、東西二つの郭があり、主郭ともいうべき東郭には北郭が付属し、二重の土塁と堀割に囲まれている。副郭ともいうべき西郭は、東郭と共有の一重の



第8図 大西館北郭と東郭背後の土塁・堀割（西北から）

土塁と掘割に囲まれている。このような防御機能の発達した大西館は、戦国時代のものであるべきで、その点従来発掘調査によって明らかにされていた普賢寺谷の城館とはやや様相を異にしている。それは、最近明らかにされた小田垣内城館とは、共通した性格のもので、対向するその位置関係からみて一対として機能していたことも考えられる。また、従来疑問視されていた古図に描かれた景観とは、よく一致することもわかった。ただし、遺構ではひとつの館とみるべき東郭と西郭が、古図では「公文所」と「大西館」に書き分けられていたことは、謎として残る。

(注1) 高橋美久二、田中淳一郎「パソコンによる文化財銘文年表の作成」(『山城郷土資料館報』6、1988)

(注2) 京都府教育会綴喜郡部会『山城綴喜郡誌』(1908)による。現状ではほとんど読めなくなっている。

(注3) 竹岡林編「京都府」(『日本城郭体系11』新人物往来社、1980)

(注4) 中井均『南山城の中世城館』(関西城郭研究会『城』No. 113、1982)

(注5) 高橋美久二「山城国一揆と城館」(『山城郷土資料館報』4、1986)

(注6) 同志社大学校地学術調査委員会『京都府田辺町都谷中世館跡』(1977)

(注7) 田辺町教育委員会『南田辺団地内試掘調査概報』(1982)

(注8) 京都府埋蔵文化財調査研究センター『田辺町小田垣内遺跡』(京埋セ現地説明会資料 No. 89-04、1989、3)

(注9) 京都府教育庁文化財保護課『文化財保護行政の概要』(1973)

(注10) 村田修三「南山城の室町・戦国時代の城」(『山城国一揆500周年記念第4回南山城の歴史を考える資料集』1985)など。

(注11) 田辺町『京都府田辺町史』(1968)

巻頭に折り込み図版で所収。

(注12) 藤本孝一「基通公墓と観音寺所蔵絵図との関連について」(京都文化財団『京都府田辺町近衛基通公墓』1988)

(注13) (注12) 文献の第28図所収、田辺町『京都府田辺町史』(1968)巻頭に折り込み図版で所収のものと酷似。

(注14) この年表作成のための史料検索にあたり、黒川直則氏、田中淳一郎氏に多くの教示を得た。

(注15) 毛利久「山城国観音寺新出土の古瓦について」(『史迹と美術』14-1、1933)など。